

## I・A・リチャーズの言語教育論

山田 泰 司

われわれ文学にたずさわる者に親しいリチャーズは文芸批評家としてのリチャーズである。しかし、彼の代表的著作を通読して、最も強く印象づけられるのは、言語活動そのものに彼が寄せる、一貫してかわらぬ深い関心である。彼が従来の印象主義的な批評を排し、かつまた観念論的な美学を排して、独自の客観的文芸理論をうちたて、現代イギリスおよびアメリカの文学批評の基礎を基いたことはよく知られているが、その出発点となっているのは、言語活動ないし言葉による伝達に対する彼の深い洞察であるということができよう。しかし、彼は、単に言語現象を客観的、科学的に観察し、これを分析することをこゝとする純粋な言語学者にはならなかったし、また書齋に閉じこもって、言語をめぐって観念的な思索にふける言語哲学者にもならなかった。彼は大学教師として、じかに学生に接した経験から、文化の担い手である言語についての認識が一般にいかに低いかを痛感し、それを高めることを生涯の仕事とするようになったのである。すなわち、彼の著作活動には、常に言語教育者としての自覚があった。ここでは、主として、そうした面

から、リチャーズの業績をふり返ってみたい。それには、まず、彼のおもな著作について、簡単に概観しておく必要がある。

彼の最初の著書は、心理学者オグデン (C. K. Ogden) と美学者ウッド (James Wood) との共著になる『美学の基礎』(The Foundations of Aesthetics 一九二二)であった。これは美とは何かという問題を、主観的な言葉にも観念的な言葉にもよらないで、純粹に因果関係をあらわす言葉で説明しようと試みたもので、心理学のたすけを借りたことは、つぎの、オグデンとの共著『意味の意味』(The Meaning of Meaning 一九二三)と同じである。『意味の意味』には「言語の思考におよぼす影響と象徴学の研究」という副題がついていて、新しい角度から言語の本質と機能とを追究した研究であり、この本が二人にとって、彼らのその後の著作活動の出発点となったことは、この本の新版を出すたびに、新たな序文をつけて、新著との関連について説明を加えていることから明らかである。さらに、この本は二人によって意義深い研究であったばかりでなく、アーバン (W. M. Urban) やランガー (S. Langer) などのシンボルの理論にもつながっており、近年新しい展開を見せている一般意味論 (General semantics) とも無縁でない、実り多い研究であった。次にリチャーズは、こんどは単独で『文芸批評の原理』(The Principles of Literary Criticism 一九二四)を出した。これは彼の科学的、より正確には心理学的な文学論を体系的にのべた現代イギリス文学批評における画期的な著書で、とりわけアメリカの新批評家 (New Critics) たちに、すこぶる

大きな影響をあたえた。一九二六年には、『詩と科学』(Science and Poetry)が出るが、これは『文芸批評の原理』において展開された理論を、もう少しわかりやすい言葉で、かつ短かく書いたもので、現代文化に対する分析が行われており、リチャーズの批評理論の背後にあったと思われる文明論がかなりはつきりあらわれている。また、多くの批判をあびた、詩における文章を科学における陳述から区別して指すためにリチャーズがつかった「擬似陳述」(Pseudo-statement)と「う用語も、この本の中で使われている。次に出た本は、さきの『文芸批評の原理』におとらず現代文学批評のあり方に多大の影響をあたえた『実践批評』(Practical Criticism 一九二九)である。これは作者名を伏せて十数篇の詩をケイムブリッジの学生に読ませて、その反応を調べることによって、リチャーズの文学論の基本的な問題のひとつである、詩の喚情的な意味の分析をあきらかにしようとした、いわば臨床的実験であった。次に、一九二九年から一年間、北京の清華大学で教えたリチャーズは、その時の産物として『孟子の心性論』(Mencius on the Mind 一九三二)を書いた。孟子の文章の翻訳(英訳)を通じて、そこにいく通りもの意味が可能であることから、翻訳家を悩ます困難を説明し、語や文章のもつ多様な意味を分析するための「多定義」(Multiple Definition)の技法を探究したものである。この問題は、次の『理性の基本的規則』(Basic Rules of Reason 一九三三)において、いっそう詳しく解説されている。一九三四年には、感情言語の妥当な評価に照らしてコウルリッジの想

像力の理論を再検討した『コウルリッジの想像論』(Coleridge on Imagination)が書かれた。コウルリッジのリチャーズにおよぼした影響は、すでに『文芸批評の原理』において見られるが、ここでは心理学の立場をすてて、認識論の立場と呼ぶべきものからコウルリッジに向っているところにちがいがある。その意味で新批評家たちは、本書をリチャーズの著書の中でも、とくに高く評価しているようである。一九三九年には、アメリカのペンシルバニア州プリン・モア大学での連続講演をもとにしてまとめた『修辞学の原理』(The Philosophy of Rhetoric)が出る。これは、新しい修辞学は「誤解と誤解防止法の研究」をその任務とすべきである、との主張をきっかけ、言葉のもつ複雑な機能を哲学の立場から分析したもので、コンテクスト(文脈)および隠喩が文章の中で果す微妙な役割を詳しく論じている点からも見逃すことのできない好著である。ケイムブリッジにもどったりリチャーズは、次に、さきに『実践批評』において詩について行った実験を、こんどは散文に適用して『解釈教授論』(Interpretation in Teaching 一九三八)をまとめた。練習問題として散文の短文を課し、その内容に対する学生の自由な解釈のし方をもとにして、修辞学、文法、論理学の面から、言語教授の諸問題を検討したものである。次の『一頁をどう読むか』(How to Read a Page 一九四二)は『解釈教授論』の延長として、文章を読むに際して、いかにして誤りを少なくするかという問題に対するリチャーズの答えである。ここでは、初步的な段階における文章の理解が扱われ、また、'make,

‘get’, ‘give’ などの基本的な単語による読み方の練習が試みられているが、こうした関心は次の著書『ペーシック英語とその使用法』(Basic English and its Uses 一九四三)へと発展する。リチャーズは『孟子の心性論』において「多定義」の技法を試みたころから、定義を行うには、ある限られた単語で足りることに気付き、オグデンの考案にかかるペーシック英語に深い関心を示し、これの普及につとめてきた。ペーシックを意味論的訓練の道具として応用するばかりでなく、これを簡單平易な国際補助語としても役立てたいという念願からである。『国家と平和』(Nations and Peace 一九四七)の中では、世界政府樹立のために、ペーシックの八五〇語よりもさらに少ない四〇〇語以下の基礎英語で役立てようと提案している。

—

オグデン・リチャーズは『意味の意味』において、言語から生ずる誤りとして、次の五つのタイプをあげている。

(1) 発音上のごまかし。これは似かよった音の言葉で、その適用範囲までも類似しているかのように取り扱うことである。この顕著な例は、ミルン (J. S. Mill) が ‘desirable’ (望ましい) という単語を ‘visible’ (見える) や ‘knowable’ (知られる) と同じようなぐあいに拡張できるかのごとく使用していることである。「望ましいこと」(ought to be desired) という意味の ‘desirable’ は「誰かによって見られる」(able to be seen by somebody) という意味の ‘visible’ と用法上一致す

るものではない。

(2) 実体化のごまかし。われわれが考えをなにか一般的な意見にまとめようとすれば、いきおい、言語を省約し、凝縮しなればならない。がしかし、その省約語を実体化 (hypostatize) する必要はないのである。この実体化の習慣がいかに一般的であり、またいかに有力であるかは、徳 (virtue) 自由 (freedom) 民主主義 (democracy) 平和 (peace) 宗教 (religion) などの抽象語を考えてみればわかるであろう。

(3) 両義語使用のごまかし。例えば、‘perception’ という語は、知覚されたものを指すのか、また知覚することを指すのか。同様に、‘knowledge’ は知られたものも指すし、知ることにも指す。両義語使用のごまかしは、このような言葉を、問題になっている種々の指示物に同時に用いるために生ずる。「美」という言葉が美しい物の属性を指したり、あるいはその属性が観察者におよぼす情緒的効果を指すように用いられる場合は、このごまかしの適例である。この種のごまかしは、愚論をもっともらしくみせる点では、誠実な人類をあざむく他のどんなごまかしよりもはなはだしい、とオグデン・リチャーズは述べている。

(4) 言葉の魔術。これは言葉というものがあつて物の一部であるとか、あるいはその言葉と符合する物を常に暗示する、という迷信である。この迷信のために、われわれは往々にして、言葉は道具であり、言葉と物との関係は間接的であることを忘れる。また、こうした迷信はリチャーズが『修辭学の原理』の

中で「固有意義の迷信」と呼んでいるもの、すなわち、言葉にはそれぞれ独特の意義（理想的にはただひとつの意義）があつて、それはその言葉の用法や言葉のつかわれる目的とは独立に存在し、かつその用法や目的を支配するという一般の信仰にも通ずる。

(5)情緒的意味と指示的意味との混同。オグデンリチャーズは、言語の用法を二つに分けて考へる。『意味の意味』の中では、科学的言語を「象徴的言語」とよび、詩の言語を「喚起的言語」とよんでいるが、リチャーズが『文芸批評の原理』の中で行っている「言語の科学的（＝指示的）用法」と「言語の情緒的用法」という分け方のほうが、いっそう適切かも知れない。「言語の情緒的用法」による詩においては、言葉が何かを正しく指示しているかどうかは問題にならない。科学的言語で考慮すべき重要な問題は、それが何かを正しく指示しているかどうかであるのに対して、情緒的言語で大切なことは、喚起された態度の性格であつて、指示の真否は考慮外におかされるべきである。この区別がはっきりと認識されていないために、詩の適切な読み方が阻害されている。（ただし、詩ほど純粋でない文学形式、小説や劇においては、情緒的意味と指示的意味との関係は、もっと複雑になるであろう。）

以上あげた、言語によって五つの生ずる誤りから脱する方法として、オグデンリチャーズは、当時盛んであつた種々のタイプの心理学から援用して、言語についての正しい態度を植へつけようとしているが、その説明はあまりに複雑なので、ここ

で触れることは控える。ただ、のちにリチャーズが『実践批評』の中で、人間の使う言葉の意味を、(一)言葉の概念的な内容である「趣意」(sense)、(二)書き手の読者に対する態度を指す「調子」(tone)、(三)自分が書いている事柄に対する書き手の態度を指す「感情」(feeling)、(四)意識するとしなにかかわらず、書き手があげようとする効果を指す「意図」(intention)の四つに分解して、読んだり(聞いたり)する際に、こうした四つの意味から成る「総合的な意味」(total meaning)に注意を払うべきであるとする考えの萌芽が、すでに『意味の意味』の中にあらわれていることは指摘すべきであろう。意味のこうした分解のし方は、決して絶対的なものと考へられてはならないが、言葉を分析する際に、かなり有効な手がかりを提供してくれることは否定できない。

## 二

言語教育者としてのリチャーズの立場が最もはつきりとあらわれている彼の最初の著作は、さきに触れた『実践批評』である。リチャーズは、この本の目的として、三つあげている。

「第一に、批評家としてであれ、哲学者としてであれ、教師としてであれ、心理学者としてであれ、あるいは単に好奇心に富んだ人としてであれ、およそ文化の現状に関心をいだく人々に新しい種類の資料を提供すること。第二に、自分が詩(および同性質の事柄)について、どう考へ、どう感じ、なぜそれを好み、またきらうかを自分で発見したいと願う人たちに、新し

い技術を提供すること。第三に、識別力やわれわれが聞いたり読んだりするものを理解する能力を伸ばすのに、現在われわれが用いている方法よりも、もっと効果的な教育方法への道を整えること。」

これらの目的を達成するための証拠固めとして、リチャーズは学生に詩の批評を書かせたのであるが、結果は、読み方における種々の欠陥を暴露するさんたんたるものであった。彼は、こうした欠陥を十種類に分類して各項について詳細に論じているが、この中で中核をなしているのは、おそらく「見当違いな連想と紋切型の反応」と題する項であろう。新しい詩に接する時、われわれが最も警戒しなければならぬのは、こうした型にはまった反応であり、それは「経験からの逃避」を意味する、とりチャーズは指摘する。観念や反応が非常に普及すると、それは規格化、レベルの低下へと向う傾向があるゆえに、マス・コミュニケーションは芸術に対するこのような脅威を、今日とりわけ強くしている。しかし、微妙な観念や反応が伝達され得るおもな手段の一つとして、リチャーズは詩に希望を託している。「すぐれた詩がその価値を現実との接触の緊密さに多分に負うているとするならば、そのことよって詩は非現実的な観念や反応を打破するのに強力な手段となるかも知れないのだ」と言って、現代における詩の効用を強調している。ただし、詩を現代において意義あらしめるためには、それを読み解くための効果的な方法があみだされなければならない、というのがリチャーズの主張なのである。

とはいっても、『実践批評』においてリチャーズが、詩を読むための具体的改革案を提示してくれたわけではない。むしろ、読詩の際に障害となる困難を指摘するにとどまっているといえる。しかし、このような困難ないし落とし穴に注意をおこたらないならば、われわれが詩に対する態度は、著しく改善されるであろうことは十分に察することができる。実際、この本が現代批評にあたえた影響はきわめて健全なものであった。その意味で、これはすぐれて教育的な本であったということができよう。

### 三

詩の解釈の問題から、リチャーズは散文の解釈にも手を伸ばした。学生に言語の使用法についていろいろの理論的問題が起るような、いくつかの散文の例を読ませて、その各例文の内容について、質問に答えさせたのが『解釈教授論』である。そして、修辞学、文法、論理学の面で、一般に学校で行われている教え方がいかに誤ったものであるかを指摘しようとしたものである。

修辞学についていえば、リチャーズは言語のさまざまな機能、特に隠喩のはたらきについての学生たちの認識がいかに浅いかを、大きく取り上げている。リチャーズにすれば、隠喩というものが単に修辞法にとどまらず、言語の本質にかかわる重要なはたらきであるのに、一般には文飾にすぎないと見なされていることが奇異であり、なげかわしくも感ぜられたのであ

る。そこで彼は『修辭学の原理』で説いた隱喩の重要性を、ここで、ふたたびくり返している。

しかし、リチャーズが、この本の中で、最もはげしく攻撃しているのは、従来の文法書であろう。彼が取り上げている文法書は規範文法であるから、彼のように常に言語の流動性を意識し、確定的な規則に敵意をもつ者には我慢がならなかったであろう。彼が非難しているのは、これら文法家が構文の分析にあたって、文脈的要素を無視し、彼らの分類や区別を特定の目的に関連づけずに絶対的なものと見なしている点などである。これら文法家の一般論は大まかには正しいにしても、実際の文章の細かい解釈には役立たないものであることがほのめかされている。リチャーズが心に描いているのは解釈学的文法論であるから、従来の規範的な文法書に不満を感じたの当然であろう。

そこで、リチャーズは従来の巨視的文法に対して、解釈のための微視的文法を提唱している。彼の唱える文法が体系的にどのようなものになるかをリチャーズは説明していないが、それが何よりもコンテキストを重視し、それを核にしたものであることは推測できる。そして、そのような文法は従来のものとはがらりと変ったものになるであろう。

従来の文法とあわせて彼が非難しているのは、慣用法 (Idiom)

についてのものである。伝統的な文法に当てはまらない語法、またはそれによってうまく説明のつかない用法を、すべて慣用法として片付けるのが、これまでの行き方であった。「すぐれた作家がそのように書いているから、その用法は正しいのだ」というような理くつは、精神の自由な動きを阻害し、言語による思考という行為について自己批判的な、有益な反省を抑圧するものだ、とリチャーズは言う。適切な用法か否かを決定する標準はわれわれの心の中に宿っているのであって、こうした批判力を養うことが言語教育の役目の一つであるべきなのだから、慣用法については選択の自由を常にあたえておくのが望ましい態度である、というのである。そして、ふたたび、言葉がそのコンテキストにおいて互いにかにはたらし合うかを研究することが、解釈文法の目的であると結論している。

リチャーズの言語教育に関する関心は、ほかにベーシック英語や「多定義」にもあらわれており実に多岐にわたっているが、種々の矛盾も多い。それらについてのべることは他日に譲りたい。

(一橋大学助教授)